〔公開講座要旨〕

空海『吽字義』における「大我」の構造

研究員　猪股　清郎

空海にとって「大我」という言葉は、人の自然観・宇宙観の個別的実感としての大我観と、「毘盧遮那（大日如来）」という普遍的な「ほとけ」の境界が、表裏一体となって出会う言葉である。

■『吽字義』における「大我」、即「毘盧遮那」（三摩地の境界）

『吽字義』の中で「大我」という言葉が登場するのは、𑖩吽字の分釈としての𑖨麼字の実義「一切諸法吾我不可得」の説段である。空海はここで、「一切世間は我我と計すと雖も未だ実義を證せず。**唯大日如来有りて、無我の中に於て大我を得たまえり**」と言う。すなわち、〈我（自我・吾我）を突き抜けて→大我（大日という主体）へ〉である。さらに彼は『大日経疏』の文を利用して麼字門「円融の実義」を説く。すなわち「**我則法界なり、我則法身なり、我則大日如来なり、…我則天・龍・鬼神・八部衆等なり。一切の有情非情は、麼字にあらざること無し**」と言い切り、しかも「**小**（我）**にして大**（我）**を含す**」と結ぶ。まさに〈内心の大我〉であり、これは空海が好んで使う表現である。さらに空海は、その𑖨麼字を内に含んだ「𑖩」字そのものを観じ、そこに三密加持する真言者の「心」（意）に寄り添い、それを「我覚」（識大）に導き、そのまま「大我」即「大日如来（毘盧遮那）」の境界を共有しようとする。

また空海は、同じく𑖩吽字の分釈としての𑖭汙字の実義「一切諸法損減不可得」の説段においては、「**仏眼を以てこれを観ずるに、仏と衆生と同じく解脱の床に住す**」として、仏の視点すなわち「三摩地」の境界をあらわす。これは彼の本覚観の核心であり、空海は常にその視点（仏眼）に渉入しつつものを言っている。

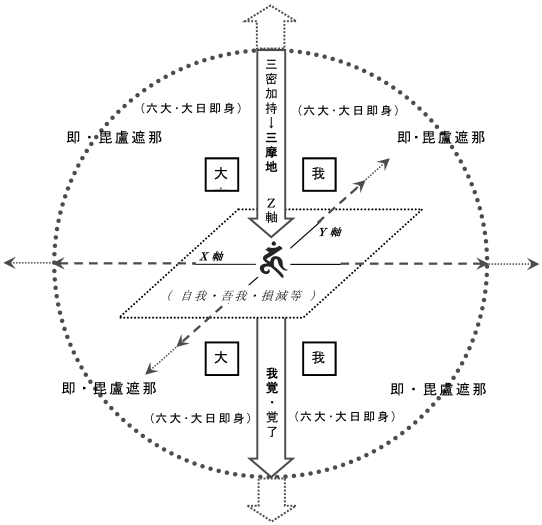
■『吽字義』における「大我」の構造図

『吽字義』における「大我」の構造を、拙著で示した〈「大日即身」の動態構造図〉註に沿って図示すれば次の通りである。

図の中心に「𑖩」（吽）字がある。これは三密を行ずる空海、そしてすべての真言行者の心（意）の「はたらき」である。中央部にある細い点線で囲まれたX軸Y軸の「横軸」が交わる平面は日常の我々の世界、「自我とか吾我とか損減など」に執われる「隨縁」の境界である。そしてその中心の𑖩（吽）字に「三密加持→三摩地」の「縦軸」Z軸が貫いたとき、そこに「我覚・覚了」を生じ、そのまま「大我」即「毘盧遮那」という「法然」の境界を現生さ

空海の『即身義』の根本原理によせていうならば、「六大」＝「大日即身」のすがたともいえる。

註：拙著『空海「即身成仏」の世界―その内包する動態的構造』（2010.10 ノンブル社）463頁



『吽字義』における「大我」の構造図

せる、という「動き」を表わしている。

しかも、外側の「太い点線」は平面的な「円」ではなく、立体的かつ透明な「球」であり、X・Y・Zの三本の「軸」が常に内側から接し、さらに外へとひろげ続けている「動態的構造」をもつ球である。そして、この現生し続けている大きな球（太い点線）こそ、まさに𑖩（吽）字を観ずる自らの「意こころ」（自心・我身）からひろがってゆく**〈「大我」即「毘盧遮那」の境界〉**である。またこれを